

女子部 高等科

「私たちの服装の歴史と未来」

寺尾恵理子

女子部では創立以来制服がなく、学校生活にふさわしい服装を自分で考えて着ることを大切にしていた。今回は、自分たちの服装を考えるというテーマで高一1名、高二5名でグループを作った。実際には歴史の部分より、未来への提案が多くなった。当日はポスター発表を行った

1. 初めに

服装をテーマとして取り上げた理由の一つは、今まで女性はスカート男性はズボンというイメージがありそれに従った服装をしてきたこと。しかし近年は男女平等や LGBT の問題が大きく取り上げられるようになり、見た目の性別で服装が決められてしまうことは果たして「自由」といえるのかと生徒が疑問を持ったことにある。特に女子部には創立以来制服がなく、自分で選んで着ることを大切にしていたが、女子部の服装は現在はスカートが基本であることから、式服にスラックスを取り入れられないかと、このグループに加わった生徒もいた。

2. 報告会までの学習

まず学生服に関する服装の歴史を調べた。社会一般では 120 年前には女子の制服として袴が定着し、それから洋服へと変化、戦時中はモンペを穿く（スカート禁止）が、戦後は洋裁ブームが起き一貫して女子の制服はスカートという時代が続いた。2019 年になって女子制服にズボンを採用する学校が話題になって、女子部でも式服のスカートの布地でスラックスの試作品を作っていた。

次に女子部生にアンケートを取った結果は、女子の制服にスラックスを採用している学校があることは 67% が知っている と答えた。スラックスのイメージとして皆が一番挙げたのは動きやすさや温かさだが一方で女子学生らしくない違和感があるなどの意見も一定数あった。

更に着用したい制服としてはスカートが 36% だが、スラックスを穿きたい人が穿けばよいという人が 60% をしめ、ズボンが良いという人は 4 パーセントにすぎなかったことから、女子部生はスラック

スに対してまだ抵抗があるようだと感じたようだ。

また実際にスラックスを導入するにはルールがあいまいになるという意見も強く、ルール作りが大切だと結論付けた。

3. 衣と環境について

生徒たちは普段裁縫の授業で服を作っている。寮生活をして自分で洗濯もしている。しかしせっかく作った服を着なかったり、寮では洋服などが持ち主不明となってその後捨てられてしまう現状から、女子部生の衣への意識が低くなったと感じたという。そこでまず「The true cost」というドキュメンタリーを視聴しファッション業界の裏側に環境破壊や搾取労働の問題があることを知り、洋服一枚の価値について考えるきっかけとなった。次にエシカル協会で活動しておられる末吉里花さんにお会いしてお話を伺った。

エシカルとはそもそもは論理的、道徳的という意味だが末吉さんは私たちの良心と結びついていて人や社会、環境に配慮されている商品を作ったり買ったりすることを目指して活動されている。洋服は食糧などに比べてサプライチェーン（作る過程）が多いためエシカルな活動は遅れていることが分かった。

エシカルな活動の視点で、調べてみると、オーガニックコットンの店、チャリティーショップ、アップサイクル、パタゴニアの XpsoIX fbsDpnfhf !Upvs など様々な取り組みがなされていることが分かった。「服の流行はすぐに入れ替わってしまい、せっかく買ったのに一回しか着なかった服もある。今の自分たちは、服を安い値段で買うことができるがその背景で多くの人が低賃金労働をしていたり、環境

破壊が行われている。その裏側を知って、環境問題について自分たちができることを考え、提案したい。」との意見が生徒から出てきた。その視点を持って、ポスター展示もまとめることができた。

3. 終わりに

最後の展示パネル「私たちにできること」の生徒の言葉をそのまま引用する。

『今、イオンではフェアトレードを取りいれている。これはある一人の主婦の声から始まったことだそう。服を買う、つまり買い物をする、それはその企業への一票である。企業は私たちが必要なものしか作らないはずだ。しかしその必要なものは私たちが声を上げなければ企業には伝わらない。【買いたくない】といわれれば企業はそれを変えざるを得ない。だからどんな些細なことでも声を上げ届けてい

くことが大切であり私たちにできることである。

それともう一つ、洋服の過去・現在・未来を考えること。洋服がどんな材料を使って作られているのか、私たちがどのようにして使うべきなのか、それをどう次につなげるのか。「当たり前を当たり前と思わない」これを考えるだけで洋服に対する見方は変わると思う。私たちはこれを意識して生活していきたい。』

この学業報告会を通して自分たちの服装について考え、また今後消費者としてどのような行動を取ったらよいのかについて学びを深められた。その背景には裁縫の勉強で自分たちの服を手作りしてきたからこそ見えたものがあると感じた。今後はそこで知ったことを実行して社会にも働きかけていく一人となってほしいと願っている。